



higashiyamato no  
ひがしやまとの



こくさい こうりゅう  
kokusai koryu



## 『私たちのチャレンジ』

～青年海外協力隊員の講演会 ニカラグア&ウガンダ～

東大和市立第四中学校における国際理解講座(平成 29 年 11 月 28 日実施)

発行:平成 30 年 1 月

東大和市役所 地域振興課

☎563-2111(内線 1711)

平成27年から平成29年まで青年海外協力隊の一員として、ニカラグア共和国とウガンダ共和国へそれぞれ派遣された、島崎琴子（しまざきことこ）さんと、松田薫（まつだかおる）さんに、東大和市立第四中学校の3年生の皆さんへ、講演を行なっていただきました。その時の様子をお伝えします。

四中の体育館の中へ、華やかな民族衣装を着た、松田さん（水色の服）と、島崎さん（オレンジ色の服）が入ってこられると、会場から「わあ〜」という声が聞こえました。



まずは、校長先生からの御挨拶。  
「これから東京オリンピック・パラリンピックで沢山の外国人が日本に来ることでしょう。国際理解講座で、貴重な体験や、苦労話、これから君達が海外の方と交流していくうえで、大切な心がまえを聞けると思います。」とのお言葉をいただきました。

それでは、彼女達の活躍を、写真を通して見ていきましょう。

## 国際理解講座

### ～「ニカラグア・ウガンダでの経験を通じて見てきたもの」～

まず、講座を始める前に、彼女たちがいた国の、“初めまして”の挨拶を、生徒さん達に体験してもらいました。

松田さんのいたウガンダでは、相手と向き合って「ウサンガイレ」と言います。「あなたに会えて嬉しいです」という意味です。言いながら、手を握って上下に振ります。（あちこちから挨拶が聞こえます。）

次に島崎さんのニカラグア挨拶。ニカラグア人は、人との距離がとても近いようで、「オラ〜」と言いながら右ほっぺを近づけて、ハグして「チュッ」（音だけ）とします。さすがにこの挨拶は、日本の中学生にはハードルが高かったようで、恥ずかしがったり、笑ったり、ふざけ合ったりと、大騒ぎになりました。

ひととおり盛り上がったところで、講座が始まりました。まずはビデオの上映です。「一人は弱い。一人は迷う。でも、世界を変えてきたのは、いつの時代もたった一人の強い想いだ。」

このナレーションで始まったのは、青年海外協力隊のVTRです。メッセージ性の強い映像で、生徒さん達はぐっと集中しました。

まずは、松田さんの自己紹介です。松田さんは市内の小学校、そして、生徒さんと同じ東大和市立第四中学校の出身です。その後、高校、大学へと進学し、多文化理解を学ばれました。中学時代はバスケットボールと陸上をされていて、走り高跳びでは東京都で3位という実力の持ち主です。



また、島崎さんは、東大和市立第六小学校出身で、その後は私立の中学校、高校、国立の看護大学へと進学し、看護師として3年間勤務されました。また、子どもの頃から新体操をされたり、中・高・大学時代はずっとバレーボールを続けたりと、スポーツウーマンの一面もあります。

さて、青年海外協力隊とはどのようなものでしょうか。それは、自分たちがもつ技術・知識・体験を発展途上国の人々のために活かす活動です。分野は多岐にわたり、学校の先生、看護師、家畜や農業関係など、様々な方が活躍されています。現在、世界には196ヶ国ありますが、協力隊はそのうちの88ヶ国で活動しています。松田さんと島崎さんは、どのような活動をされていたのでしょうか？

### 松田さんのお話

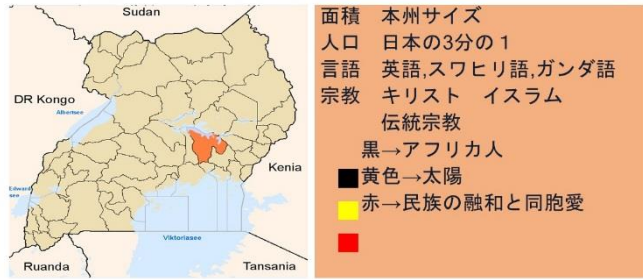
松田さんは、実は小・中学校時代、あまり勉強は好きではなかったとのこと。ですが、大学生になってから変わられたそうです。大学時代に、フィリピンと東ティモールに行ってNGOの活動を見たり、幼稚園でボランティアをしたり、アフリカのマウライに行く機会もあったそうです。その国の人々と関わる中で、発展途上国の「貧しい」「可哀そう」というイメージから、彼らのもつ底抜けの明るさ、活気ある国の様子に魅了されていきました。そして、自分の目で見て、耳で聞いて、肌で感じることの大切さを知り、学ぶことの楽しさを感じました。特に、アフリカのマウライでは、ゆったりとした時間とその国の人の優しさに触れ、もう一度アフリカに行って、彼らのために何かをしたいという気持ちになったそうです。



ここで、生徒さんに質問タイム。アフリカのイメージは？と聞かれ、「動物」「まぶしい人」という答えが。おそらく、ほとんどの人は、日本のテレビや本の影響で、マサイ族のような線が細くて真っ黒な人だったり、注射を打たれて泣いている黒人の子どもだったり、象とか動物がいる光景を思い浮かべると思います。では、実際、ウガンダの様子はどのようなものだったのでしょうか？

首都はガラス張りのビルがあって、東大和市よりも栄えているかも知れませんが。道もコンクリートで舗装されています。それとは対称に、ウガンダには4000m級の山があります（富士山より高い）。ライオンなどがいるサファリもあり、社会の授業で習ったナイル川の源流もあります。地図の右下にはビクトリア湖という大きな湖（アフリカ最大）。国の面積は日本の本州ほどです。人口は日本の3分の1（約3700万人）で、言語は英語、スワヒリ語、ルガンダ語です。

## ウガンダ共和国



では、松田さんのウガンダでの活動を聞いていきましょう。松田さんはコメ農家に、現地で栽培されているコメよりも、病気に強く高い収量が取れる種子を渡し、一緒に田植えをおこない、彼らの現金収入を増やす活動をしていました。農家にアドバイスを与え、ワークショップを開き、組合を作ることもしました。ウガンダ人はコメを食べません。食べているのはサツマイモやキャッサバ。コメは彼らにとっては貴重で、お金と同じです。コメを育てて現金を得て、子ども達の学費などにしています。

このような活動をしながら、松田さんは、いろんな葛藤があったそうです。本当はもっと底辺にいる農家の支援をしたい。自分の活

### 活動内容

- ・コメ農家さんの現金収入をあげる
- ・カムリ県生産局に配属
- ・バイクに乗って村を巡回

動はウガンダ人のためになっているのだろうか、という疑問。自分が思っていた理想と現実が違っていて、そのギャップに苦しんだそうです。その中で学んだことは、理想と現実を受け入れること。理想をもつことは大事ですが、今生きている世界のことでも忘れてはいけません。それと、自分の活動が今後どうなっていくか分からなくても、自分を信じて続けていく。そして、その先も続けるために、自分で考え続けること。この3つが大切なのだと感じたそうです。それは、松田さんが中学生の皆さんに伝えたいメッセージでもあります。



### 島崎さんのお話

島崎さんの青年海外協力隊員になるきっかけ、それは中学3年生までさかのぼります。島崎さんはバレーボール部でしたが、顧問の先生がとても怖い先生だったそうです。ですが、島崎さんは、厳しくても愛情があり、部活のことを真剣に考えてくれる先生が大好きでした。その先生が、中学3年生の引退試合の前に、部活のメンバーに重大発表をしました。「私、青年海外協力隊でエルサルバドルに行くことになりました」。その時、島崎さんは驚きと悲しみもありましたが、先生の決意を応援したいという気持ちにもなりました。そして、これからの人生で、普通に就職し結婚するだけではなく、いろんな道があるのだ、というインパクトを受けたそうです。

そして、島崎さん自身も国際協力の道に進もうと決めます。大学を選ぶとき、国際関係学部という選択肢もありましたが、その後のイメージが思い浮かばず、それなら、技術として使える看護師になろうと決めました。3年ほど看護師として働き、その後、青年海外協力隊になりました。

さて、ニカラグアに派遣が決まりましたが、島崎さんはその国を御存知なかったそうです。ニカラグアは、中南米で、日本の面積の3分の1くらいの大きさの国です。日本からは飛行機で、アメリカを経由して、16時



### ニカラグアはどこだ?!



間かけて行くことができます。

ニカラグアの写真が出てきました。一面トウモロコシ畑です。日本人の主食はお米ですが、ニカラグアではトウ

モロコシが主食です。島崎さんが仕事で1日20軒ほど家庭訪問をした時、行く先々で「まあ、琴子よく来たね」と言われ、茹でた（または焼いた）トウモロコシを御馳走してくれたそうです。（3本目の話しのあたりで会場から笑い声。）

また、ホームステイ先の家族からは、「俺の持っている馬と牛と豚は、みんな琴子のものだ」と言ってくれたそうです。彼らの温かさが伝わるエピソードですね。

それから、島崎さんが生活していたエル・サウセという所は、カラフルな家が並ぶかわいい町並みでした。



ここでまた、生徒さんへの質問タイム。・・・のはずでしたが、先に映像で答えが出てしまいました。ボタン式トイレの写真です。コンクリートの四角い椅子のフタを開けると2mくらいの穴があります。島崎さんのお仕事は、このトイレを、コミュニ

ティの人たちに安い値段で建てて、それを長期間、清潔に使えるよう指導することです。トイレのフタを閉めることは、ハエが大量発生しないためには大切です。それから、トイレの後に手を洗うこと。日本では基本的なことですが、それを指導することで病気にかかりにくくなります。



島崎さんがニカラグアに行かれている間、現地のTV局が取材に来たことがあるそうです。看護師の島崎さんや、一緒に仕事をした助産師さん、理学療法士さんが取材された時の様子がビデオに映りました。（外国語を話す島崎さんの姿に感嘆の声があがりました。）

島崎さんが活動を通して感じたことがあります。1つ目は、人として成長できたこと。2つ目は、人生は一度きりということです。

島崎さんのホームステイ先の家族には、おばあちゃんがいました。そのおばあちゃんは、ある日、風邪をひいて寝たきりになってしまいました。普段はひと家族がそこに住んでいます。週末になると、地方に住む娘さん達の家族がおばあちゃんのために集まり、それは賑やかになるそうです。その様子は、島崎さんにとって、新しい家族の形でした。島崎さんは、日本で看護師をしていた時、人生の大切な場面に出会うことが多かったのですが、例えば、これからも看護師を続けるときに、患者さんと家族の関わりについて、上手に言葉で伝えられるようになったのではないかな、と思ったそうです。

そして、人生は一度きりという言葉。青年海外協力隊を挑戦して良かった、と心から思ったそうです。とても勇気がいることでしたが、知らない国の人に出会えたことも、一緒に活動した日本人との出会いも、全てが宝物となりました。

島崎さんから皆さんへのメッセージは、「日本の粹だけで生きなくてもいいんですよ」ということ。知らない場所に行って、さまざまな性格の人に会い、いろんな習慣や考えに触れるたびに、ワクワク、ドキドキしたそうです。皆さんにも、機会があればその気持ちを味わってほしいとのことでした。

### 再び、松田さんのお話

この2年間、アフリカという土地に行って、ネット環境もない、LINEも毎日つながるわけでもない、水道も断水するし、停電もある（1週間ずっとの時もありました）。そんな場所で暮らしていて、日本の生活環境は本当に恵まれていると感じたそうです。日本では、冷蔵庫を開ければ食べ物が入っている。学校も、普段何気なく通っている子も多いでしょう。でもアフリカの人たちは、生きることにとっても敏感。一日一日を大事に生きていかなくてはならないのです。例えば、農家さんは、大雨が続くと農作物が育たず腐ってしまい、家族を養っていけない。食べ物がないから1週間家にこもり続けるしかないし、生きていけない。そのような彼らと接していて、生きていくということについて考えさせられたそうです。

最後に、四中の生徒さんに贈りたいという言葉が、画面に写し出されました。南アフリカのネルソン・マンデラの言葉です。（学校の方に英文を読んでもらいました。）

The great glory in living lies not in never falling,  
but in rising every time we fall.

Nelson Mandela

ネルソン・マンデラは、人種隔離政策（アパルトヘイト）があったアフリカで、白人と黒人の平等を訴えて、27年間投獄された後、大統領になった人物です。彼は、「人生ってというのは転ばないことが大事なんじゃないよ、転んだとしても何回も自分で立ち上がること、それが大事だよ」と言っています。

皆さんは、まだまだ長い人生で、いろんなことにチャレンジする機会があるでしょう。松田さん自身も、陸上部で悔しい思いをしたり、大学時代にやりたいことに失敗した経験があったそうです。でもそのたびに、自分の力で起き上がって、進んでいく。それが大事なのだと思います。「皆さんにも、しなやかで、倒れてもまた立ち上がって、自分で歩める、そんな人になってほしい」というメッセージを贈り、講座を終えられました。

## お礼の言葉（四中の生徒さんより）

本日はお忙しい中、東大和市立第四中学校にお越しいただき、誠にありがとうございました。今日の講座の中で、青年海外協力隊のイメージがすごく分かって、様々な国で、様々な生活様式で、自分達と全く違う生き方をしている人たちがいて、その中でも困難を乗り越えながら活動されたことが、本当にすごいと思いました。

今の時代はグローバル社会であり、世界で活躍できる人たちが求められている中で、今日のようなお話しが聞けたことは、私たちにとって大きな財産になると思います。今日学んだことを今後活かしていきたいと思います。

今日は素晴らしいお話、本当にありがとうございました。



第四中学校の皆さん、  
松田さん、島崎さん、  
ありがとうございました！

編集・発行 東大和市 市民部 地域振興課 市民協働係  
東大和市中心3丁目930番地  
電話：042-563-2111（内線1711）